石川病薬ニュース

石川県病院薬剤師会会報

令和2年(2020)/11.30 発行　No.175

CONTENTS

・巻頭言
・県病薬各委員会の「活動状況と今後の展望」
・薬局の窓口から
・エキスパートに聞く！　～輝く石川のキラ星～
・Web開催研修会、学会参加報告
・他都道府県病薬会誌寄贈一覧
・南船北馬
・寄稿

〔巻頭言〕
「おくすりを紡ぐ病院薬剤師の役割」
石川県病院薬剤師会 理事　感染制御委員会委員長
浅ノ川総合病院 薬剤部部長　笹山　潔……1
〔県病薬各委員会の「活動状況と今後の展望」〕
地域連携推進委員会　金沢大学附属病院　坪内　清貴……3
学術委員会　石川県済生会金沢病院　森戸　敏志……4
教育研修委員会　金沢大学附属病院　磯田　和也
JCHO金沢病院　西上　潤……5
中小病院委員会　やわたメディカルセンター　石田美由紀……7
総務委員会　小松ソフィア病院　中山　貴央……8
精神科病院委員会　浅ノ川総合病院　澁澤　宗
加賀こころの病院　中川　将人……9
ホームページ委員会　石川県済生会金沢病院　角　紀一郎……10
がん治療委員会　金沢医科大学病院　高橋　喜統……13
臨床実習委員会　金沢大学医薬保健研究域薬学系　菅　幸生……15
ＮＳＴ委員会　金沢赤十字病院　大川　浩子……16
感染制御委員会　金沢大学附属病院　東　昂翔……17
編集委員会　浅ノ川総合病院　船戸　元子……19
〔薬局の窓口から（79）〕
「脊髄損傷に対するシリンジポンプを使用したステロイドパルス療法」
金沢脳神経外科病院　明正　純子……21
〔エキスパートに聞く！ ～輝く石川のキラ星～（17）〕
「日本臨床薬理学会認定ＣＲＣ」　金沢医科大学病院　相川　正則……23
〔Web開催研修会、学会参加報告〕
「第36回がん薬物療法セミナー（WEB開催）に参加して」
公立能登総合病院　水上　徳博……26
「第30回日本医療薬学会年会（WEB開催）に参加して」
金沢大学附属病院　三坂　恒……27
〔他都道府県病薬会誌寄贈一覧〕……28
〔南船北馬〕……29
〔寄稿〕
「古寺との結縁-52」妙成寺・総持寺祖院　～能登の古刹名刹～　院瀬見義弘……30
〔編集後記〕
〔病薬ニュース発行欄〕

表紙写真　撮影
：熊走　尚志

鼠多門のライトアップ
尾山神社側からの姿、裏表紙は同じく斜めから多門橋を絡めての鼠多門
昼間の姿とは違った趣が幻想的で美しい。

巻頭言

おくすりを紡ぐ病院薬剤師の役割

石川県病院薬剤師会常任理事
浅ノ川総合病院　薬剤部長　笹　山　　潔

私が薬剤師として社会に出てからかれこれ二十数年が経ちました。病院薬剤師として研鑽を積みながら仕事や課題に取り組んできましたが、振り返ってみると本当にあっという間でした。月日の流れの早さに愕然とします。

明治から始まった薬剤師の長い歴史から見れば、私の薬剤師経験歴などほんの短い期間に過ぎませんが、それでもこの間、我々を取り巻く環境は大きく変化してきました。そして、人口減少、超高齢化、認知症患者数の増加、人工知能（artificial intelligence： AI)、情報通信技術（information and communication technology：ICT）の利用、価値観の多様化、働き方改革等、一昔前には想像もしなかった環境変化の波が技術革新を伴ってより大きくなっています。更には今年に入り新興感染症（covid-19）が世界中で猛威を振るい、これまでの社会通念や経済活動基盤は揺らぎ、生活様式が一変する中で我々は様々な問題と課題に直面しています。

このような近年の激動的環境変化は医療も例外ではありません。本邦では、2025年問題が提起され、看取りも含めた在宅中心の社会支援体制（地域包括ケアシステム）にシフトする中、病院・病床の役割分化・連携強化が推し進められています。我々病院薬剤師に対するニーズや役割も大きく変化しています。以前は、必ず入院して行われていた抗がん剤治療も現在では外来通院で行われるようになり、近年では治療成績の優れた経口抗がん剤の開発も目覚ましく、在宅で抗がん剤治療を受ける患者割合が増えてきました。また、麻薬製剤も積極的に使用されています。すなわち、在宅でのハイリスク薬の使用が益々増加しているということになりますが、同時に有害事象の発現リスクが高くなることを示唆しており、服薬指導のみならず、更なる医薬品の適正使用と安全管理が求められています。それに付随して、少子化や核家族化での老々介護、超高齢化による認知症患者の増加もあわせて、服薬管理、アドヒアランス、残薬、ポリファーマシー等の課題も密接に関わっています。

在宅中心の医療の中で、患者は医療、介護、生活支援・予防などそれぞれの状態に応じた支援を受けています。当然、受ける支援も一定ではなく、患者状況の変化に応じてphaseが変わります。また、支

援を提供する側も多くの人が関わっています。そのような中で求められるのは安心で安全な薬物治療の継続です。どのようなphaseにおいても患者の薬剤情報が共有化され、適正な薬物治療を受けることができる環境を構築することが必要です。それを遂行していくうえで私は病院薬剤師が薬物治療状況を把握するマネージャーとしての役割を果たしていくことが重要だと考えています。何といっても、病院薬剤師は詳細な患者情報を入手でき、チーム医療の中で主治医とのスムーズな意思疎通が可能です。それを柱として、薬薬連携、多職種連携を通した情報の発信や収集を行い、その患者の薬剤情報や問題点を共有化した上で、主治医はじめ必要な施設・職種にフィードバックしていくことが大切ではないかと思っています。診療報酬上においても、2020年の診療報酬改定で「退院時薬剤情報連携加算」が新たに加わったことは大変大きな追い風になると思っています。

当院では病院薬剤師が入院・外来に一貫して関与することで、より質の高い医薬品の安全管理を目指すことをコンセプトに、がん薬物療法指導をはじめとした外来指導にも力を入れています。2015年４月からはポリファーマシー対策の取り組みの一環として在宅訪問薬剤指導も開始しました。また、医師をはじめ様々な職種に参加してもらい顔の見える薬薬連携の会も定期的に開催しています。今後は、外来・入院の服薬指導内容や問題点の院内共有だけでなく、保険薬局など地域で携わる方々との情報共有をより深め、それを的確に活用できる薬剤師外来の設置を目指しています。

私が専任の病棟薬剤師として病棟に常駐した頃は、薬剤管理指導業務が病院薬剤師の新たな役割となってまだ間もないころでした。当然、病棟薬剤師の社会的な認知度は低く（いまでは病棟薬剤師が主人公のドラマまで放送される時代になったのには驚きです）、患者はもちろんのこと、医師や看護師からも薬剤師は病棟で何する人なの？とよく聞かれたそんな時代でした。私自身もこれからの病院薬剤師は病棟でも活躍する時代が来たのだと意気揚々とした半面、服薬指導もさることながら、他にどんな活動やコミュニケーションをとっていけばいいのだろうかとあれこれ模索していたことが大変懐かしく思います。現代の刻々と変化する社会環境や多様化するニーズの中、病院薬剤師は今後更に大きなスキームの中での活躍が求められる時代になっていくのだと実感しています。